

英語にみられる女性差別

三 宅 亨

は じ め に

1970年代からの女性開放運動の高まりは、不十分ながらも社会や家庭内での女性の地位向上という点で世界的に幾つかの成果を挙げてきた。このような運動の中で言語学の分野においても、言葉のなかに潜む性差別 (Sexism) の問題が取り上げられるようになってきた。これは主として社会言語学を中心とする領域において論じられてきたが、¹⁾ その研究対象は、性差別表現の他にも性別による言葉の違いや言語による疎外の問題などがある。性別により使用する言葉が異なることは、「女らしい表現」などと言われるように日本語の例を考えれば明白である。言語学者はこの違いに注目すると同時に、どのような原因と過程を経てそのような違いが生じたのかを明らかにしようと努めてきた。さらに feminist を自認する人々は、現在使用されている言葉が抑圧者としての男のための言葉であり、女は男中心の言葉から疎外されているとして、その実態と本質を解明しようと試みている。本稿では性差別、すなわち現代英語の中で日常的に使われている言葉に現われる女性差別を考察する。

本論に移る前に、最近の新聞記事を二つばかり取り上げて日英の対比を見ることにする。

吹田市民病院の検尿用の採尿室には「婦人用」「殿方用」との表示があります。男女別にするのは当然ですが、「殿方用」の表示に、ちょっと首をかしげました。

「殿方」は辞書で引くと「女性から男性を呼ぶ尊敬語」とあります。「女子用」「男子用」とするか「女性用」「男性用」として、男女を平等に扱うべきじゃないでしょうか。²⁾

—『朝日新聞』1986年1月6日

この記事は朝日新聞社の社会部に寄せられた読者（男性）からの電話の内容であるが、これと同じような現象が英語においてもみられる。1985年の夏、米国カリフォルニア滞在中に筆者はある人から、最近では公衆便所の女子用の表示が徐々にではあるが、これまでの Ladies に代わって Women が用いられるようになった、と聞かされた。これに対する男子用の表示は Men である。その後注意してみると、古くからある場所は別として、確かに新しく設けられた洗面所などの表示は Men と Women となっているようである。詳しくは後述するとして、英語の lady という語は今では時と場面によっては差別用語となり得るのである。

同じく『朝日新聞』の「はい社会部です」欄に寄せられた一「主婦」の声を紹介する。

京都市少年合唱団の演奏会を聴きに行きました。団員はほとんどが女の子で、男の子はわずかです。なぜ少年少女合唱団にしないのでしょうか。

—同紙, 1986年1月28日

これに対する京都市教育委員会生徒指導課の答は、

三十三年に結成した時からこの名称です。「少年」は「年が少ない」の意味で使っており、子供一般を指しているのですが。

英語では man は人類を表わし、男女を問わず人間を意味する。しかし今日しばしばこの語が問題にされるのは man が日常的には多くの場合男のみを指すからである。日本語の「少年」もこれと同じことがいえるのではなから

ろうか。京都市教育委員会の回答は、にわかには納得しがたいと思われる。

Bolinger (1980:104) は次のように述べている。

The gun of sex-biased language may be rusty, but it is there, and the greatest danger is unawareness that it is a gun, and is loaded.

我々が日常何気なく使っている言葉の中に偏見や差別が含まれているのである。

1

まず、身分・地位などを表わす表現からみていくことにする。よく知られているように英語では敬称として、男の場合は Mr. を、女の場合には Mrs. または Miss が用いられる。男の場合には未婚・既婚を問わず Mr. が使用されるのに対し、女の場合は未婚者と既婚者では呼び方が異なる。Marital status という、いわばプライベートなことまで呼称の中にあからさまに表現される。

(1) “How do you do, Mr. Mason,” she said. “I am Henrietta Hull, Miss Minden’s confidential secretary and manager; and this, I presume, is Mr. Paul Drake, the detective.”... [中略]

Mason smiled. “*Is it Miss Hull or Mrs. Hull?*”

“It’s Henrietta Hull,” the woman said, smiling, “but if you need any other handle, it’s Mrs.”

—E.S.Gardner, *The Case of the Mischievous Doll*

さらに、既婚女性の場合には次のような制約を受ける。

(2) a. Mrs. Mary Smith

b. Mrs. John Smith <formal>

Mary Smith という既婚女性は通例 (2a) のように呼ばれるが、少し改まっ

た (formal) 場合には (2b) のように夫の氏名の前に Mrs. を冠して呼ばれる。つまり、妻は夫の所有物 (あるいは付属物) であるかのような扱いを受けることになる。

(3) A sleepy voice said, "Waldo County Sheriff's Department. Sergeant Lambert."

"This is *Mrs. George Mellis* at Ceder Hill House."

"Yes, Mrs. Mellis." The voice was instantly alert. "What can I do for you?"

—S. Sheldon, *Master of the Game*

(4) She telephoned *The New York Mail*. There was some difficulty in getting through to its publisher. Finally, using the leverage of her name, she reached Haig. "This is *Mrs. Matthew Noyes*," she announced.

—J. Brady, *The Press Lord*

上に引いた例は、いずれも夫の名前 (の持つ威力) に頼らざるを得ない女の姿がよく現われている。また、次例は、離婚 (あるいは夫と死別) した女性が first name に自分の旧姓を、family name には夫の姓を使用するという社交界の慣習を述べたもので、女性自身の first name は「消えて」しまうのである。

(5) Real disappointment, however, was voiced by Rachel's mother, Mrs. Saltonstall Lindquist, in Worcester, Massachusetts. It was the custom in American social circles for women who were divorced, but who preferred keeping the family name of the former husband, to use as their first name not their given name, Mary or Esther, but their own family name. To refer to one's self as Mrs. Armstrong Cheney was much more polished than to appear in the social columns as Mrs. Mary Cheney.

Rachel's mother, being a widow rather than a divorcee, really

had no right to adopt this pleasing convention, but with a family name like Saltonstall, she could not withstand the temptation, and as Mrs. Saltonstall Lindquist she retained the social prestige to which she felt herself entitled.

—J.A.Michener, *Space*

1984年の米国大統領選挙を前にして、民主党は Geraldine Ferraro を副大統領候補に選出した。この報道にあたって『ニューヨーク・タイムズ』紙は彼女の呼称に戸惑った。同社の編集方針では記事中の人名には Mr., Mrs., Miss を使用することになっている。Ferraro 女史は既婚者で三人の子供の母親でもある。ところが、彼女の夫は John Zaccaro と称し、夫婦であっても彼女は「旧姓」を名乗っている。Mrs. John Zaccaro とも、Miss Ferraro とも呼べない同紙は結局 Mrs. Ferraro と呼ぶことにした。しかし、同紙のコラムニスト William Safire は “On Language ” と題するコラムのなかで「彼女を Mrs. Ferraro と呼んだのでは、その人物を的確に表現していることにならない (Mrs. Ferraro is “a person she is not.”)」と主張した。³⁾

このような不公平に対して、女性開放運動家の中から、未婚既婚を問わず男をすべて Mr. と呼ぶように、女もすべて Ms. [miz] と呼ぶことが提唱され、1973年には米国政府にも公認され、すでに最近の辞書にも採録されている。しかし、実際には Ms. が未婚女性を指すのに用いられることは少なく、Mrs. の代わりに使われる場合のほうが多いように見受けられる。⁴⁾

この呼称には女性自身を含めて多くの個人や団体が反対を唱え、あるいは抵抗を感じているのも事実である。上にあげた『ニューヨーク・タイムズ』の場合も、方針として Ms. を使用しないことになっており、Safire が前述のコラムのなかで「そろそろ（編集方針を変えて）Ms. を使う時期だ」と述べたのに対して、編集部は異例の措置を取り、彼の記事に囲み記事を挿入し、「Ms. という語はビジネス・レターでみられる造語であり」「記事を書くのに用いるのはあまりにも作為的 (too contrived) である」と反論している。

すでに公認され、辞書に採り入れられてはいるものの、Ms.が完全に Mrs. や Miss に取って代わることはないのではなかろうか、と思われる。

(6) Excuse me, { lady.
 madam / ma'am. <formal>
 miss. <polite>
 *Ms.

米週刊誌 *TIME* (1984年12月31日号) は当時の国連大使 Jeane Kirkpatrick の講演内容の紹介記事を掲載しているが、それによると、彼女は「国連にもアメリカ政府にも女性差別が依然として生きている」と述べ、Henry Kissinger 元国務長官はしばしば“Dr. Kissinger”と呼ばれていたが、彼女の場合は政治学博士であるにもかかわらず、大抵の場合“Mrs. Kirkpatrick”と呼ばれると語っている。

Key (1975) は、自分が受け取った手紙の宛名に“Dr. and Ms. and Mrs. Mary Key”や“Ms. Ph.D. Mary Key”, なかには“Dr. and Mrs. Mary Key”などというのがあった、と報告している。これらの例は、人々の間に Dr. の肩書だけで即「男」と判断してしまうという抜き去り難い先入観がある事を物語っている。このような混乱はいま暫くは続くものと思われ、次のような表現が抵抗なしに受け入れられるには時間がかかるであろう。

(7) After *Mr. and Dr. Kerslake* had returned home from their honeymoon in Italy they both settled happily into Beaufort Street.

—J. Archer, *First Among Equals*

Miller & Swift (1980) は、新聞記事などの書き言葉において、書き手が相手の女性の肩書や地位（ここでは Mrs. や Miss をも含める）をよく知らない場合や、たとえ知っていても、その女性がどのように呼ばれたいかが分からない場合には、次のように、まず肩書を付けず full name を用い、その後は last name を用いることを勧める。

(8) *Dorothy Klein* is chairwoman of the committee. Yesterday *Klein* said...

少なくともアメリカにおいては男女を問わず肩書を付けないで書くような傾向が増えつつある。筆者自身が受け取るアメリカ人からの手紙の宛名にも散見される。

一方、英国人の Crystal (1984) は、このように手紙などの書き言葉において肩書を取り去ることは出版界や学問の世界などでは増えているが、“quite a radical suggestion” であると言う。ただし、話し言葉において仕事の上での紹介の場面などでは少しもおかしくないと言う。

(9) a. Can I introduce Mary Jones?

b.*Can I introduce Mrs Jones?

c. Can I introduce Mrs Jones of our Accounts Department.

Crystal によれば、仕事の上での紹介では被紹介者が既に Mrs Jones を知っている場合を除いては (9b) のような表現は用いられず、(9c) のようになんらかの修飾限定語句を伴ってのみ Mrs. が用いられる。

2

英語の中には男女の性別を表わす対語がある。例えば、独身男性を表わす語は bachelor であり、これに対応する語は spinster である。しかし、この2語は単なる性差を表わすのではなく、ニュアンスが異なるのは次の例文から明らかである。

(10) a. Mary hopes to meet an eligible bachelor.

b.*John hopes to meet an eligible spinster.

なぜ (10b) が非文になるのか。これは spinster には単に独身の女性 (unmarried woman) という neutral な意味だけでなく“(elderly) woman thought unlikely to marry”⁵⁾ の含みがあるので、形容詞 eligible と共起しないのである。

次に widow と widower を比べてみる。

(11) a. Margaret is a widow.

b. Margaret is John's widow.

c. John is a widower.

d.*John is Margaret's-widower. — *LDCE* (s.v. WIDOW)

この場合、夫が俗にいう「髪結いの亭主」であっても Mr. Mary Smith とは決して言わないのと同じで、(11d)は非文になる。一方(11b)が示すように夫が死んでも、女は以前として彼の所有物たり得るのである。

Master と mistress を対比してみると、差別的ニュアンスはより明確になる。R. Lakoff(1975)を借用する。

(12) a. He is a master of the intricacies of academic politics.

b.*She is a mistress of the intricacies of academic politics.

男は「(あるものを)自由に駆使できる人、精通者、熟達者」⁶⁾であり得るが女は制約を伴う。

(13) a. She is mistress of great fortune. — *RHD*

b. She is a complete mistress of the household arts.

—『小学館英和中辞典』

などと用いることもあるが稀であり、文学修士 (M. A.) は Master of Arts であって Mistress of Arts ではない。

頻度順語義配列を採用している辞書のなかには Mistress の第1義に「女主人」を掲げているものが少なくないが、実際には “a woman with whom a man has a sexual relationship, usu. not a socially acceptable one”⁷⁾ の意で用いられることの方が多いようである。

(14) a.*Harry declined to be my master, and so returned to his wife.

b. Rhonda declined to be my mistress, and so returned to her husband.

この例にみられるように、男は決して女の所有物にはならない。これに反して、mistress がこの語義で用いられる場合には必ず男性を表わす語の所有格と共に用いられる、と Lakoff は指摘している。

(15) a. Mary is John's mistress.

b.*Mary is a mistress. cf. (11a)

Mistress に限らず、女性を表わす語尾としては -ess 形がよく知られている。かつては感情的色彩を何らともわなかった、この接尾語を含む語も時代の変遷と共に軽蔑的なニュアンスを帯びるようになってきた。今日、-ess 形は女性にとって不愉快な軽蔑的響きを持つようになってきている。⁸⁾ Authoress, poetess, sculptress などは急速に用いられなくなり、author や poet が使われるようになりつつある。レストランで客を迎え、テーブルへ案内する女性は hostess と呼ばれるが、テレビのショー番組の司会などをする女性は host と呼ばれるのが普通である。ここに将来 -ess 形を排し、男女とも同じ語で呼ばれるようになる可能性があるのではなかろうか。

(16) When Nehru became independent India's first Prime Minister in 1947, Indira moved back into his house with her two sons and became his official *host*. —*TIME*, November 12, 1984

Crystal (前掲書) は、waitress, stewardess, heiress などの語や duchess, empress, goddess などの「地位の高い人(high-ups)」を表わす語は今でも使われている、という。しかし、いくつかの航空会社では70年代から stewardess を排し、flight attendant という語を使用し始めている。

3

前項の最後にあげた stewardess と flight attendant に関連して、ここでは身分や職業を表わす語を考えてみる。日本語でも、「女中」という言葉は「お手伝い(さん)」に取って代われ、今や「主婦」という語も避ける人もある。同様に英語でも“housewife”という語が避けられ、北米では“homemaker” と呼ばれるようになってきている。⁹⁾ また“housewife”に対して“househusband”(主夫)なる語も登場した。

(17) This *househusband* staff was bullshit. It was all very well for John Lennon to be a *househusband* but the average guy not only had a living to earn but had his pride and his place in the world to maintain. Let anyone who wanted a *househus-*

band go find some vegetarian acidhead who wanted to be one.

—J. Rossner, *August*

身分・職業を表わす語には -man で終わるものが少なくない。女性開放運動の高まるなかでこれらの語は次々と言い換えられていった。Chairman は chair, chair one, chairperson などと呼ばれるようになった。また女性であることを明示する chairwoman も用いられる。

(18) Despite her small, slight figure, the Sequoia Club *chairwoman* occupied the witness chair with grande dame demeanor.

—A. Hailey, *Overload*

しかし、この語は必ずしも定着したとは言えず、Hailey も (18) の文のすぐ後では同じ人物を chairman と呼んでいる。また、現実には chairperson が用いられるのは女性に対してのみで、男性の場合には依然として chairman を使う傾向がある。¹⁰⁾

Salesman は salesperson と言い換えたものの、実際には性別によって salesman と saleswoman のように呼ばれている。

この他 craftsperson, countryperson, postperson, spokesperson などという表現も採り入れられ、Congressman には Congressperson (複数形は Congresspersons または Congresspeople) も用いられるようになった。

女性開放運動の高まるなかで “person” という語の重要性、否、自らが一個の人格を備えた person であることの重要性について女性は目覚めて来た。世間的话题を呼んだ『クレイマー・クレイマー』の中の夫婦の次のような会話中に現われる person も、そのような脈絡で捉える必要がある。

(19) “Ted, I want to get a job.”

“What do you mean?”

“I’m going bananas. I can’t spend my days with a two-year-old.”

“Maybe you should hire some sitters.”

“I’m not interested in a couple of free afternoons.”

“Joanna, darling, young children need their mothers.”

“Linda has a job. She gets up, she goes out, she's a *person*.
And I'm standing there with Billy and Jeremy and their Cleo,
who can't wait for me to leave so she can watch *As the
World Turns*.” —A. Corman, *Kramer versus Kramer*

話は少しそれるが、man という語については、最初にもふれたように男女を問わず「人間」を表わす包括的な (generic) 語であるが、通例は男をあらわすので、mankind は humankind あるいは human beings に置き換えられている。Man-made は artificial, synthetic, manufactured などと言い換えることが提唱されている。では、「夫婦」を表わすのに “man and wife” でなく、“husband and wife” だけが用いられるようになるだろうか。

1975年に米国労働省は職種簿にある3万5千の職種のうち3千5百の職種呼称に関し、いくらかでも性の中立性を増し、性別資格を減らすために呼び換える計画にとりかかった。foreman は supervisor, governess は child mentor, bridal consultant は wedding consultant, headmaster は school principal と呼び換えられた。また、headteacher という語も生まれた。¹¹⁾

この項に掲げた置き換え語のうち、どれだけが定着するかは今後の社会的課題である。

4

抜き去り難い偏見の現われとして先に Dr. の例を挙げたが、Key (前掲書) は1960年代にアメリカ南部の調査旅行に出掛けた時の様子を次のように述べている。給油のためにガソリン・スタンドへ立ち寄り、料金を支払おうとして身分証明書とクレジット・カードを出したところ、若い男の店員が “Gawrsh, I've never seen a *woman* doctor!” と驚きと感心の混じった声をあげた。

Woman と lady という語の使用には微妙な問題がある。小西 (1970 : 243) は次のように指摘している。

上品さを尊んだ時代には、man と woman は gentleman, lady とは明らかに区別して用いられた。特に高貴な婦人に woman などと呼べばたいへんであった。それゆえ、ともかく一昔前までは男は gentleman, 女は lady とすればまず無難であると思われさえしたこともあった。ところが、今日では、gentleman, lady は会場での切り口上, ladies' footwear のような商品用語, 広告, 洗面所の入口などを除いて逐次消えつつある。

Ladiesが洗面所でも消えつつあることは既に述べた。

Miller & Swift は “Lady is used most effectively to evoke a certain standard of property, correct behavior, or elegance,” と指摘し、first lady や leading lady のような尊称 (honorary epithets) として用いられる場合は差し支えないが、職種呼称に用いると通例卑称になる、と言う。特に lady が形容詞として用いられると、しばしば “This woman is not to be taken seriously,” というメッセージを伝えていることになる。A lady doctor などといえ、[男よりも能力的に劣る学者・医者] という意に解されるであろう。従って、次のような表現には、いささかの抵抗を感じる。

(20) I remember once accompanying a Japanese *lady professor* to the hospital to see her mother-in-law, whom she quite liked, before major surgery.

—P. McLean, *America : Inside and Out*

「ことばと女を考える会」による『国語辞典にみる女性差別』(p.202) から引いておく。

職業名の前に「女」「女性」「婦人」「女子」「女流」などの語をつけるということは、もともとは男子のみの領域であった分野に女性が進出してきたことに対して、「女でありながら」「女であるのに」もっとひどいことばでは「女のくせに」「女だてらに」と驚きと警戒心を示しながら「まあ、あなたの場合は、特別に例外的に認

めましょう。しかし、あくまでも『女』であることを忘れないで」と念押ししているのです。

要するに、lady とは「男の付属物・愛玩物であって、社会的には無能力な、かよわい存在であり、その言動は真面目に考慮するに値いせず、男が庇護すべき者」である、ということになるであろう。レディー・ファースト (Ladies first) などという習慣もこの考え方の延長である。今日でも社交的な場面では lady がふつうに用いられている。例えば、レストランで男女が食事をする時には、男がとりまとめて注文することが多い。特に一流レストランなどへ行くと、男と女は別々のメニュー表を渡されることがある。女の受け取るメニューには料金が書かれていないのである。こういう場面では、“X for this lady and Y for me,” などと言って注文し、決して woman は用いないのである。女性の社会への進出と地位向上に伴って、最近アメリカの career women¹²⁾の間ではレディー・ファーストの扱いを拒否する動きもみられる。

商店用語や広告に依然として lady が用いられるのも、女は実生活とは係わりがなく、男の飾りであるから出来るかぎり美しく上品であるべし、という原則が働いているのではなかろうか。

これに対して、今日では woman という語は “the most useful all-around word for referring to adult female people” であり、“independence, competence, and seriousness of purpose as well as sexual maturity” を含意するという。¹³⁾ 女性開放運動は Women's Lib であって、決して Ladies' Lib ではない。その含意の強さゆえに woman という語の使用を避けて lady や girl, 果ては gal のような語を敢えて使用する動きもある。

Girl は boy と対をなすが、その用いられ方は対等ではない。POD⁷⁾ に “female child; young woman; woman working in office, factory, etc.; female servant; man's girl-friend” と定義されているように、「少

女」だけを指し示すのではない。成人女性にも用いられるのである。もちろん boy も成人男子を表わすことがあるが、その頻度と差別的ニュアンスにおいては girl に及ばない。

Woman が independence や competence, maturity を表わすとすれば、girl は “dependence, incompetence, immaturity” を表わすことになる。Miller & Swift の挙げた次例を対照されたい。

(21) I'll have my girl run off some copies right away.

(22) I'll ask my secretary (*or* assistant *or* Ms. Blake) to run off some copies right away.

(22) が neutral なのに対し、(21) には明らかに見下した態度がみられる。無意識にせよ、能力の低さを表わすのに用いられている。日本の社会においても、女子社員を「女の子」と呼ぶ慣行がある。

Girl, woman そして既にみた person の 3 語を含む例を紹介しておく。

(23) When we hugged good-by, I must say that I had some rather deep feelings for the *girl*-or *woman*, I guess you have to say now. She was a smart-ass beyond any doubt, and she tended to be a bit talkative and loud, and she also tended to mind my business a bit too much. But she was a good *person*-maybe a bit too good for me.

-P.E. Erdman, *The Last Days of America*

Gal は girl の異形であるが、小西 (1981:342) は、いまではもはや卑語や俗語では決してなく、れっきとしたアメリカ口語として標準的に広く用いられているとみてよい、¹⁴⁾ と述べ、Moss (1973) の次のような説明を紹介している。

gal *n.* 女性のことであるが、特に、オフィスで秘書や助手として働く女性をいう。▶専門職についている男性が “my gal” と言った場合自分の助手 (assistant) か秘書 (secretary) のことをいっている。また、“my girl” と言えば、自分の

女友達 (girl friend) か娘 (daughter) のことをいっている。¹⁵⁾

この新しい意味を担わされた語がアメリカ社会にどれだけ受け入れられるかは予測し難い。ただ, gal が単なる girl の置き換えのための「隠れ蓑」として使われる可能性があることだけは指摘しておきたい。

5

この項では, 今までに扱わなかった例を紹介してみる。

同一語が男に対して用いられた場合と女に対して用いられた場合に意味が異なって来る場合がある。

(24) a. John is a professional.

b. Mary is a professional.

R. Lakoff (1975) によれば, (24a) のように男について用いられた professional は通例, 医者や弁護士などの専門職を表わす。それに対して, (24b) の場合は, 専門職を表わすこともあるが, この文を耳にすると大抵の人が先ず頭に浮かべるのは, “prostitute” であるという。

次に“marry off” という表現をみることにする。

(25) a. Mr. and Mrs. Jones married off their daughter.

b.*Mr. and Mrs. Jones married off their son.

これに対応する日本語に「片付ける」という表現がある。個人差もあろうが, 通例「娘を片付ける」とは言うが, 「息子を片付ける」とはあまり言わないようである。『国語大辞典』(小学館,1981) には「嫁入りさせる。縁づかせる」とあり, その定義と例文から判断して, まるで不要な物のように「片付けられる」のは女の場合に限られるようである。自動詞は「片付く」である。何年か前に筆者の妻は, 妹の結婚が決まった時, ある人から「お妹さん, 片付かれたそうでよかったですね」とたいへん丁寧に言われ, 驚いたと語っている。「片付く」という差別用語も敬語になるのか, と呆れていた。

6

人称代名詞使用にみられる性差別を考えてみる。他のインド・ヨーロッパ語とは異なり、現代英語には文法的性 (gender) は存在しない。名詞は自然界の生物的性 (sex) に基づいて、he や she という代名詞で受け、無生物は it を使用する。複数形は sex に関係なく一様に they を用いる、というふうに極めて簡単な体系をなす。

にも拘らず、実際の言語使用の場では様々な問題をうみだしている。

(26) Anyone can have a drink if — wants.

Crystal (1984) は (26) の文の空欄にどのような代名詞が入るかを尋ねている。伝統的な用法に従えば、この空欄には he を入れなければならない! Anyone だけでなく someone, everyone, no one, そして anybody, somebody, everybody, nobody は、he で受ける「きまり」になっている。唯一の例外はその場に居合わせる人がすべて女の場合だけであろう。いや、厳密に言えば、次に掲げたアメリカのある州の法律の条項のように、女だけを指す場合でも he で受けるのが規範的文法規則にかなっているのである。¹⁶⁾

(27) “No person may require another person to perform, participate in or undergo an abortion of pregnancy against *his* will.”

しかし、いかに規則にかなっているとはいえ、これは明らかに女性差別である。そこで最近では次のような表現が用いられるようになってきた。

(28) Anyone can have a drink if *he or she* wants.

人によっては she or he を用いる。次のような表記をする場合もある。

(29) If a natural parent was not untouched by jealousy of *his/ her* children, there was the enormous balancing factor of those children's being part of oneself.

—J. Rossner, *August*

Quirk *et al.* (1985:770) によれば、この表現は当初は informal な用法に限られたが、現在では formal な用法のなかにもだんだん受け入れられる

ようになりつつあり、特にアメリカ英語においてその傾向がある。しかし、これではいかにもまわりくどい表現であり、何度も繰り返されると (30) のように clumsy になり、(31) のような語法の「揺れ」が生じることもある。

(30) If a student dose not hand in *his or her* paper today, *he or she* will not be allowed to continue the course.

(31) Everyone ate as much as *he or she* wanted and when *they* had all finished the disciples collected the leftover scraps and filled twelve baskets full. —S. Steen, *A Child's Bible*

規則を盾にとって頑迷に自説をまげない規範的文法家や言語学者は別として、世間一般の人はどのような使い方をしているのであろうか。Langendoen (1970) は、次の文に対する付加疑問を46人の被験者に求めている。

(32) Everyone likes me.

回答者のうち“Doesn't he?” と答えた者は12名にすぎず、残り34名は“Don't they?” と答えている。Everyone は文法的には単数であるが、意味的には複数の人間に言及しており、ここでは notional concord が grammatical concord に優先しているのである。(26) の空欄には they を挿入し、したがって wants を want と改めて、

(33) Anyone can have a drink if they want.¹⁷⁾

とするのが世間の趨勢にもかなっているといえよう。

英語には男女の両性を示す単数代名詞が存在せず、男性を表わす単数代名詞 he に頼らざるを得ないところに、このような問題が生じてくる余地があるのだが、これを逆手にとったユーモラスな話が Key によって報告されている。

1975年、米国インディアナ州で一人の女性ダンサーが猥褻物陳列罪で起訴された。ところが、判事は、法律には“a person exopsing an inappropriate part of *his* body” とあり、被告人は女性であるから、この法律に違反してはいない、と起訴をしりぞけた。

Generic “he” の使用は様々な問題を生む。¹⁸⁾ 公の場で話したり、文章を

書く人は次のような注釈（あるいは弁明）をしなければならない。

(34) I want to apologize to the mother and father who have a girl and are frustrated by having the child called him all through this book. It's clumsy to say him or her every time, and I need her to refer to the mother.

—B. Spock, *Baby and Child Care*

(35) In the interests of clear and simple writing, I have adopted one pronoun for both sexes. When you read “he,” think “he / she.” We all know I am referring to both, so why make an unreadable fuss about it?

—C. Reimold, *How to Write a Million-Dollar Memo*

(36) Finally, a word of apology to female readers. The words ‘learner’ and ‘teacher’ are conveniently neutral as regards to sex, but the English pronoun system has forced me to choose between ‘he’ and ‘she’. The fact that I use ‘he’ from this point on is of only superficial significance: learners and teachers are female as well as male.

—W. Littlewood, *Communicative Language Teaching*

今日、女性が多数を占める職業などを表わす言葉、例えば secretary, nurse, preschool teacher, baby-sitter, shopper などに generic “she” が用いられることがある [Miller & Swift]。Feminist である言語学者の Cameron は、この立場をさらにすすめて、その著書 (1985) の序文で次のように書いている。

I have also avoided offensive and sexist language, replacing it either with ‘neutral’ terminology or, more often, with terms that draw attention to the existence of women. Most sex-indefinite and generic referents in this book will be *she* and *her*. If there are any

英語にみられる女性差別

men reading who feel uneasy about being excluded, or not addressed, they may care to consider that women get this feeling within minutes of opening the vast majority of books, and to reflect on the effect it has.¹⁹⁾

ここで generic “one” と人称代名詞との関係について少し触れておきたい。英国では通例 (37) のように代名詞を用いなくて one を繰り返すのに対し、アメリカでは (38) のように he で受ける用法も広く認められている。

(37) *One* must be careful about *one's* investments.

(38) Naturally, this is plastic, *one* doesn't carry highly radioactive material around in *his* trousers pocket.

—B. Wohl, *The China Syndrome*

ところが、女性開放運動の進む中で (38) のような米語用法が影をひそめつつあり、アメリカでも (37) のような用法への回帰がみられる、と Quirk *et al.* (1985:388) は指摘している。

さて、無生物に言及する際に擬人法 (personification) が用いられる場合がある。無生物は男女いずれかの性を付与されることになるが、その基準が問題になる。

「国家」がしばしば女性扱いを受け、*she* が用いられることはよく知られている。

(39) a. England is proud of *her* history.

b.*Germany had developed his economic growth...

—Crystal (1984)

車や飛行機、船などの乗り物も通例女性名詞扱いを受ける。この現象について、Miller & Swift は、国も大地も乗り物もすべて「器 (receivers or containers)」とみなされるから、と説明している。乗り物を女性扱いするのは、両者とも man によって制御が可能であるから、と考えたら穿ち過ぎ

であろうか。Bolinger (1980) の掲げる次のような例をみていると、そう思えてくるのである。これはゲーム・コンピューターに関する会話である。

(40) 'I usually win,' the teacher continued. 'But *he* can play quite well sometimes.'

'*He?*'

'Yes, that's odd; but most people call computers "*he*" and ships "*she*".'

明らかな差別の例として問題になり、女性開放運動の中で抗議の対象になったのがアメリカにおけるハリケーンの呼称である。年輩の日本人なら記憶にあると思われるが、日本でも戦後米軍占領下において、台風を「キャサリン」(1947年)、「キティ」(1949年)、「ジェーン」(1950年)などと称していた。わが国では日米講和条約発効の翌年(1953年6月)から現在の通し番号方式になった。しかし、アメリカでは1978年になって「破壊的な被害をもたらす暴風雨の名前を、女性だけに限るのは不公平」との抗議を受け、やっとこの慣行を改め、ハリケーンを呼ぶ際に一つおきに男女の名前を使用することになった。台風の呼称については翌1979年に改められた。³⁰⁾

この項を終わるにあたって、一つのエピソードを紹介しておく。一部の女性開放運動家たちは“history”は“his story”であるとして、この語を排斥し、“herstory”を提唱している。これを語源さえ知らぬ、と笑うのは簡単である。しかし、長い人類の歴史の中で、女性がこれまで置かれてきた社会的及び家庭的地位と役割を考えると、決して笑って済ませられないのである。

む す び

本稿では現代英語の中にみられる女性差別を表す表現を幾つか取り上げて考察してきた。ここでは取り上げなかったが、bitch, cunt, pussy catなどの女性を指す俗語や卑語の類は、男性を指す言葉よりはるかに多いといわれている。これらの語は、人前では口にすべきでない俗語や卑語であるとい

う性質からして、使用者もそれが差別用語であることをわきまえている場合が多い。その限りにおいて、これらの俗語や卑語は別の扱いをしなければならぬ。本稿では、このような明らかな性差別用語よりも、むしろ無意識のうちに日常生活の中で使われている表現を中心に考えてきた。

厳密に言えば、「言葉による差別を撤廃する」という課題は純粹の言語学や英語学の領域を超えるものであろう。筆者は記述主義の立場をとる。やや自嘲的に言えば、世の中の言語使用の実態を「高見の見物」と決め込んで観察するのが仕事である。A male chauvinist pig ではないが、けっして女性開放運動家でもない。妻からはせいぜい an armchair feminist と軽蔑的に呼ばれるくらいである。しかし、「差別のための隠れた武器」として言葉が利用され続けている限り、言葉を研究対象とする言語学者は、言葉の持つ危険性を公にする義務がある。

すでに何度も借用してきた Miller & Swift (1980) は多くの性差別表現を取り上げ、その一つひとつに解説と例文を掲げ、それに代わる望ましい表現を示している。この著書は今日アメリカで多くの人の参照するところとなっている。文筆に携わる人々にとっての手引き書として知られている *The Chicago Manual of Style* (13th. ed., 1982:61) には次のような注意が書かれている。

In addition to regularizing details of style, the editor is expected to catch errors or infelicities of expression that mar an author's prose. Such matters include dangling or misplaced modifiers, unclear antecedents... [中略] ... unintentional repetition of words, *racial or sexist connotations*, and so on.

さらに、同ページの脚注には “For useful and sensible suggestions on how to avoid sexist connotations see Casey Miller and Kate Swift,

The Handbook of Nonsexist Writing.” とある。

もちろん、このような言葉の言い換えだけで差別はなくなる。「女中」を「お手伝い(さん)」と呼び換え、“housewife”を“homemaker”と呼び換えても実態が変わらなければ差別はなくなる。逆に、「侵略戦争」を「聖戦」と呼び、「敗戦」を「終戦」と呼んだように、置き換えによって、醜い現実を糊塗することもできる。Cameron (1985:74) は Miller & Swift の立場を「生ぬるい」と、次のように批判している。

For them, sexist language is an outdated excrescence which everyone but a few reactionaries would dearly love to be rid of; mere force of habit is the only thing that props it up it seems they take the optimistic view that we are now living in a post-feminist world, and that their job is to help language catch up with society.

Ms. という語に関連して Key (1975) は次のような意見を述べている。

Even if Ms. were widely accepted throughout all of society, the real problem of sex differentiation and discrimination is still there. And this is where the real trouble lies.

社会が男女の性的役割を規定し、その文化が言葉となって現われる。しかし、言葉が個人の意識や認知、思考方法を規定する面があることも忘れてはならない。言葉が知らず知らずのうちに差別を助長することもある。本稿の始めに紹介した京都市教育委員会の回答などは、その一例である。社会が言葉を規定し、言葉が社会を規定する。鶏が先か、卵が先か、という不毛の論争をしてはならない。

COD は1982年に出版された第7版で“racial discrimination”を表わす語句に“R”の表示を付与し、辞書使用者の注意を促した。やがては、その

他の差別用語にも辞書編纂者の配慮が加わるであろうと思われる。繰り返すことになるが、言語学者は言葉の奥に潜む差別の実態を探ることが出来るし、その研究成果を明らかにすることが義務であり、差別をなくしていく上でのささやかな貢献が出来るのではなかろうか。

〔注〕

- 1) Cameron (1985)によれば、構造主義、社会言語学、記号論などの領域で研究が進められているという。
- 2) この疑問に対し、吹田市民病院は「ご指摘の通りです。すぐに改めたいと思います」と答えている。
- 3) *TIME*, August 20, 1984
- 4) 小西 (1981:341)
- 5) *POD'*
- 6) 『小学館英和中辞典』
- 7) *LDCE*
- 8) Crystal (1984:101-102)
- 9) housekeeper も homemaker と呼ばれる。
- 10) Words like *chairperson* and *sportsperson* were supposed to be sex-neutral replacement for *chairman* and *sportsman*, but in fact they are only ever used for women : Cecil Parkinson is Chairman of the Tory Party, but Joan Ruddock is Chairperson of CND.
—Cameron (1985:89)
- 11) 『最新英語情報』第2版 (小学館, 1986), 『ジャンル別最新日米表現辞典』 (小学館, 1984)などによる。この他にも様々な個人や団体, 新聞社, 出版社などが代案を提案している。その多くは -man を含む語であり, 本文で述べた -person 形以外にも, fireman を fire fighter に, fisherman を fisher に, businessman を business executive または business manager に, cameraman を camera operator に, mailman を mail carrier あるいは

letter carrier と改めるなど。

- 12) この語自体が差別用語であり、職業名で呼ぶべきである、と主張する人々もいる。
- 13) Miller & Swift (1980:76-77)
- 14) COD⁷では、依然として vulg. (卑語) 扱い。
- 15) 山岸訳 (1977) による。なお、改定版にあたる Moss (1984) では、この“gal”の項目は削除されている。
- 16) Key (1975)
- 17) (33)のような文は informal なスタイルでは広く用いられている。Foster (1968) によれば、everyone などを he よりも they でうける傾向は17世紀以来みられる現象である。
- 18) 両性を表わす新たな代名詞を造ろうとする様々な試みがなされている。例えば、s/he (発音は [ʃi:hɪ:]) もその一つであるが、これでは所有格が造れない。別な提案では、主格 ve, 所有格 vis, 目的格 ver があるが、いずれも案にとどまっている。
- 19) 同書の p.88には、次のような主張がみられる：

The strategy I believe is helpful is one used in this book — every indefinite or generic referent is feminine. I and several other linguists use this practice all the time. When questioned by people who find it odd, we reply that we are practising positive discrimination through positive language. If it comes naturally to men to say/write *he*, obviously it comes naturally to me to use *she*. In a non-patriarchal world, would we not tend to visualise someone rather like ourselves?

I have no illusions that positive language will change the world. More women will not take up science just because scientists are referred to as *she*, but what might be achieved is a raising of people's consciousness when they are confronted with their own and

英語にみられる女性差別

others' prejudices against saying *she*.

20) Bolinger (1980) 及び『朝日新聞』1979年5月12日(夕刊)

参 考 文 献

- Bolinger, D. : *Language - The Loaded Weapon*, Longman, 1980
- Cameron, D. : *Feminism and Linguistic Theory*, Macmillan, 1985
- Crystal, D. : *Who Cares About English Usage?*, Penguin, 1984
- Foster, B. : *The Changing English Language*, Penguin, 1968
- Key, M.R. : *Male / Female Language*, Scarecrow Press, 1975
- 小西友七 : 『現代英語の文法と語法』, 大修館書店, 1970
- : 『アメリカ英語の語法』, 研究社出版, 1981
- ことばと女を考える会 : 『国語辞典にみる女性差別』, 三一書房, 1985
- Lakoff, R. : *Language and Woman's Place*, Harper & Row, 1975
- Langendoen, D.T. : *Essentials of English Grammar*, Holt, Rinehart & Winston, 1970
- Miller, C. & K. Swift : *The Handbook of Nonsexist Writing*, Harper & Row, 1980
- Moss, N. : *What's the Difference?: A British / American Dictionary*, Hutchinson, 1973 (邦訳 : 山岸勝栄『えい・べい語考現学—どこがどう違う?』こびあん書房, 1977)
- : *The British / American Dictionary*, Revised, Hutchinson, 1984
- Quirk *et al.* : *A Comprehensive Grammar of English*, Longman, 1985
- University of Chicago Press, The : *The Chicago Manual of Style*, 13th Ed., The University of Chicago Press, 1982

(1986.4.7 受理)